

## 書 評 と 紹 介

法政大学大原社会問題研究所編  
『人文・社会科学研究と  
オーラル・ヒストリー』

評者：御厨 貴

本書は、オーラル・ヒストリーと人文・社会科学研究のあり方についての初めての現状報告である。9人の研究者の報告は、自らの専攻する学問分野との関係の中で、オーラル・ヒストリーを意識化した時にどう位置づけたらよいかという視点で共通している。私自身もこの20年余り、オーラル・ヒストリーによって表象される様々な事象に主体的に取り組んできた。そこで小文では、私自身が現在オーラル・ヒストリーに関して抱いている批判や評価を前面に押し出し、本書の各報告を補う形で論を進めることとしたい。

「はしがき」に早川征一郎氏がはっきりと書かれているように、実はそれと判然とは意識されない形で、オーラル・ヒストリー的なものは、この国のあちこちに昔から存在していた。近代に限ってみても、聞き書、聴き取り、談話記録、などの言い方で口述記録はあった。また回顧録や自叙伝と称するものの中にも、回顧談、あるいは自らを語る類のものがしばしば見られた。近代日本の学問が、民俗学、歴史学、社会学、政治学、といった枠組の形成をへて自立す

るにつれて、先に述べた多様な言いまわしをもった口述記録の方法は、これまた意識化されぬまま、それぞれの学問の枠組の中に収まっていたと見てよい。本書の各報告は、いずれもこうした事実を浮かび上がらせている。

やがて人類学、経営学など、さらにはライフ・ヒストリー、ジェンダーなど、新しい学問が海外のイムパクトを受けつつ、とりわけ戦後において確立してくると、インタビュー、ヒアリングといった洋風な言いまわしが生れ、はやることになった。本書を読むと、政治史、女性史、社会史、労働史、経営史など、ほとんど人文・社会科学のすべての分野で、かなり早くから、口述記録が用いられていたことがわかる。

だからこそ、逆に学者、研究者のタコソボ専門化を、ここに明確に読みとることができる。口述記録という方法を取り出して、すべての学問を横断してみるという発想が、ついでこの国ではこれまで生まれなかったのだ。分野によって差はあるものの、口述記録の共有財産化が、技術的制約もあって同じ分野の中でさえもなかなか進まなかったことにも一因はある。一つ一つが手探りで、職人芸的なワザを必要とすると信じられてきたことも関係なしとしない。ともかく口述記録という方法自体もまた経験と年季の世界に封じこめられてきたのだった。

1990年代になって、オーラル・ヒストリーという表象の下に、これまで様々な言い方をされていた口述モノが、急速に集約されていく事態に立ち到った。もっともオーラル・ヒストリーという言葉自体は、本書の各報告で指摘されているように、戦後のある時期からポツポツと使われ始めていた。ただそれが、方法のレベルに止まらず、記録や作品化されたもの、さらには

それを用いた研究そのものまで、いわば口述の川上から川下まですべてを包摂した言葉として言われるようになったのは、1990年代後半からと言ってよい。

オーラル・ヒストリーを包摂概念として提唱し実践してきたことについて、伊藤隆報告では次のように述べている。

平成4年度から6年度にかけて、渡邊昭夫氏を中心とする科研費「戦後日本形成の基礎的研究」が行われ、その中でもオーラルヒストリーが行われ（この時には「オーラルヒストリー」という言葉が用いられた）、私も政治家を中心に7人のオーラルヒストリーを行った。この科研費の終了とともに、翌年御厨貴氏（氏はその後『オーラル・ヒストリー 現代史のための口述記録』＜中央公論社、平成14年＞を著している。これはオーラルヒストリーについて最も纏った記述である。オーラルヒストリーの意義・方法、自身の体験を述べている。）を代表者にして科研費申請を行い、幸いに認められて、本格的にオーラルヒストリーを行った。これが平成9年の政策研究大学院大学の創設と同時に、「政策情報プロジェクト」として大学のプロジェクトになり、さらに平成12年度から文部省の中核的研究拠点プログラム「オーラルメソッドによる政策研究の基礎的研究」に発展して、平成16年度までの5年間、180人弱を対象に1200回、おおよそ2400時間のインタビューを行った。

伊藤報告は事実として正確である。では他の専門家はこれをどう評価しているのか。保阪正康と広瀬順皓の共著『昭和史の一級史料を読む』（平凡社新書、2008年）では、このように指摘されている。

保阪 1990年度以降、政治学者の御厨貴さんたちが中心となって、後藤田正晴、竹下

登、宮澤喜一といった権力中枢にいて政治を動かした人に話を聞いて、それを記録化するオーラルヒストリーが歴史研究の手法として定着してきた感があります。

広瀬 御厨さんのプロジェクトについては、政策研究大学院大学でやられていたということが性格として非常に強いんですね。元々これは政治決定の内側を聞くという目的で始められたものなんです。

石原信雄を嚆矢に、後藤田正晴、竹下登、宮澤喜一、渡辺恒雄と、次々と話題の人物のオーラル・ヒストリーを商業出版したこと、それ以外でも物量作戦的にオーラル・ヒストリーを開始し報告書の形で刊行し始めたこと、これらがやがて社会現象化するにつれて、ちょうどミレニウムをはさむ十年間の間に、オーラル・ヒストリーはこの国の一つの社会通念と化した。

しかしその道のプロはオーラル・ヒストリーという言い方に居心地の悪さを感じている。伊藤隆氏自らが「インタビュー」との言い方に馴染んでいるし、保阪正康氏ははっきりと「聞き書き」といった言い方を好むと述べている。本書でも山本潔氏は、聴取られたヒストリーとの定義から「聴取り」の独自性を主張している。

さらに、「公人の、専門家による、万人のための口述記録」との私のオーラル・ヒストリーの定義は、千波万波を学問の地平の上にひきおこした。倉敷伸子報告と江藤説子報告とが、その点をめぐって論争的であるのは面白い。しかしまた大胆で詳しい定義の提唱が、これまでタコツボ縦割りのであった各々の“オーラル・ヒストリー”を縦への深掘りを進めながら、なお横断の説明に工夫を要するといった、ある種の議論のダイナミクスを生んだことに、驚いてもいる。

庄巻は吉田健二報告に見る「大原社会問題研究所のオーラル・ヒストリー」である。社会党

と社会運動のオーラル・ヒストリーが「音声資料」収集といった形で、早くも1960年前後から、「社会民主主義研究会」「鈴木茂三郎文庫」などの形で始められていたことは印象的である。この国の戦後政治史が、ひたすら保守の側からのみ明らかにされ、革新の側がなおざりにされてきたことに、今回の政権交代を機に、学問的に異議申し立てがなされることは疑いえない。そのためにも劣化著しいとされる大原社研の「音声資料」のテープおこしは、速やかに行われるべきだと考える。

つい最近、「オーラル・アート・ヒストリー」を始めたグループが「オーラル・アート・ヒストリーの可能性」と題するシンポジウムを大阪国立国際美術館で開いた（2009年11月14日）。加治屋健司、池上裕子ら美術史にとり組む若手の「日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイブ」の人たちは、アメリカはコロンビア大学の先例を見ながら、実に意欲的にアートの作家たちへのオーラル・ヒストリーを足取りも軽く行っているのが印象的であった。このようにオーラル・ヒストリーの社会現象化そして社会通念化は、新たな分野でのこの試みをこれからも誘発するに違いない。

最後に述べておかねばならぬのは、オーラル・ヒストリーの川下の問題である。つまり記録として公開されたものを、現実はどう取り扱ったらよいかということだ。使い方の工夫と言ってもよい。私は一時期この問題をコンメンタルの側面とクリティークの側面とから考えたことがある。

自分自身が携ったオーラル・ヒストリーについて、言外の意味を含めて聞き手が注釈を付けるのが、コンメンタルだ。何回か研究会にて試みたが、詳細なコンメンタルになればなるほど、屋上屋を重ねる結果となることがわかった。へたをすると聞き手の注釈が公定解釈とな

る恐れなしとしない。ではクリティークとは何か。聞き手と第三者とが同じオーラル・ヒストリーの作品を評する場を設定してみた。建築家隈研吾氏による「清家清オーラル・ヒストリー」への第三者的批評には教えられる点が多かったものの、その他はなかなかうまくいかなかった。

結局、信頼できる成果物であるかどうかは使い手の裁量に全面的に委ねるほかあるまい。あたりまえのようだが、これが当座の結論である。客観的評価基準を定めるのはまだ困難だ。そこで最近私は「オーラル・ヒストリー対比列伝」の試みをサントリー文化財団が編集する『アステイオン』（阪急コミュニケーションズ）の誌上にて連載の形で行っている。（66, 68, 69, 70, 71号既刊, 72号完結予定）これは私が聞き手、パートナーの丹羽清隆氏がテープおこしを行ったオーラル・ヒストリーの中から、職業的共通性をもつ二人を対比させながら、むしろその差異を語るというやり方に他ならぬ。

「プルターク英雄伝」ならぬ「近代思想の対比列伝」と題する。後藤田正晴VS矢口洪一、宮澤喜一VS竹下登が、雑誌の上では完結に近く、まもなく装いも新たに朝日新聞出版から公刊される。警察官僚対司法官僚、田中派對池田派（宏池会）、彼等のオーラル・ヒストリーに現れた言説の特徴が、対比を通して異なるプリズムに映し出される点が興味をひく。かくて、官僚としての生き様、政治家としての生き様に新たな光が当てられることになる。対比列伝二つに共通のテーマは、戦前・戦中派の高度成長とその後への対応の仕方を探ることにある。この二つに加えるに堤清二VS中内功を準備中である。戦後の消費生活の創り手二人の対比列伝を描いての三部作で、高度成長期のこの国の立体的な姿を描き出すことができたなら本望である。

本書は、オーラル・ヒストリーについて、色々な発想を与えてくれる点で、とても価値あ

る一冊であった。なお小文は、先日東京大学先端科学技術研究センターで行われた牧原出教授主催の「多文化共生研究会」(2009.11.28)における私の報告を一部活用している。

(法政大学大原社会問題研究所編『人文・社会

科学研究とオーラル・ヒストリー』御茶の水書房, 2009年3月刊, ix + 261頁, 定価3,400円 + 税)

(みくりや・たかし 東京大学先端科学技術研究センター教授)

センター教授)

●戦場で失われた命をめぐる民族誌  
北村 毅著 — A5判・四三三頁・四二〇〇円(税込)  
**死者たちの戦後誌** — 沖繩戦跡をめぐる人びとの記憶  
— A Postwar Ethnography of the War Dead in Okinawa  
「戦後」という新たな観点から戦後を問い直す。沖繩の戦跡という場で、人びとの日々の営みの中で、戦死者はどのように弔われ、記憶され、語られてきたのか? 膨大な文献資料と緻密なフィールドワークから、戦死者にとつて空白の「戦後」の64年を読み解く。

●「民主主義」論の新たなパラダイムを求めて  
村田邦夫著 — 菊判・四八〇頁・六八二五円(税込)

「日本人」と「民主主義」  
覇権国アメリカの「人権」「自由」「民主主義」「平和」の理念には、覇権システムとその秩序がもつ「差別」「排除」が刻印されている。

●戦後中国に残された「満洲国」の産業設備・技術の実態を解明  
峰 毅著 — A5判・二九〇頁・五八八〇円(税込)

**中国に継承された「満洲国」の産業**

— 化学工業を中心にした継承の実態  
国共内戦、復興期を経て毛沢東時代に成立した特異な産業構造において満洲化学工業の後身となった東北の化学工業が果たした役割を検証する。

●一貫した方法論に貫かれた『ノート』の学的構造を浮上させる  
鈴木富久著 — A5変型・二七〇頁・三三六〇円(税込)

**グラムシ『獄中ノート』の学的構造**

『ノート』全体を対象として、それを貫くグラムシの方法論の探求に焦点をあてつつ、その体系的・論理構造を解明する。

●二〇〇八／二〇〇九年「カナダ出版賞」受賞!!

立川陽仁著 — 菊判・三〇〇頁・五八八〇円(税込)

**カナダ先住民と近代産業の民族誌**

— 北西海岸におけるサケ漁業と先住民漁師による技術的適応  
カナダ先住民クワクワカフクウがであった近代的サケ漁業の労働の存続を分析することで、自発的かつ多様な近代化の受容とその論理を例証した民族誌。

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 Tel.03-5684-0751  
ホームページ <http://www.ochanomizushobo.co.jp/>